今年で創刊60周年

LaTina

MUSICA CONTEMPORANEA DEL MUNDO

ラティーナ世界の音楽情報誌 2012 8 AGOSTO
www.latina.co.jp
www.campeonatoasiatico.com
昭和40年3月30日第三種郵便物認可
平成24年8月1日発行(毎月1回1日発行)通巻702号

特集：ノヴォス・コ
『セブン・デイズ・

© TAKUO SATO

シコ・ピニェイロ

国際的に活動の場所を広げる
ブラジル音楽シーンの中核

文●中原 仁
texto por JIN NAKAHARA

サンパウロの若き作編曲家／ギタリスト、シコ・ピニェイロに注目せよ！ そう最初に教えてくれた人物は、ジョイスだった。

9年前に来日したジョイスから「これを聴いて」と手渡されたのが、発売されたばかりのシコのファースト・アルバム『メイア・ノイチ、メイオ・ヂーア』❶。そこにはデビュー前のマリア・ヒタが3曲に参加していて（注：当時のクレジットはマリア・ヒタ・マリアーノ）、最初は彼女の歌を目当てに聴き始めたが、20代半ばのシコの楽曲も演奏も明快な個性を備えていて心を惹きつけられた。当時は90年代後半に爆発したハイブリッドなミクスチャー・ポップを受け継ぐネオ新世代の活躍が目立ち、正統派のブラジル音楽を追求する若手があまりいなかったため、よけいにシコの音楽が新鮮に響いたのだ。

しばらくしてハタと思い出した。その3年前、シコがホーザ・パッソスのバンドのギタリストとして来日していたことを。あの粒立ちの良いギターを弾いていた若者が彼だったのか……。パズルのピースが合わさった。ホーザもジョイス同様、若い才能を見出す慧眼に定評がある。これでお墨つきの箔づけだ。

以来、シコ・ピニェイロは着実に活動の幅を広げてきた。リーダー作の他、ダイアナ・クラールのギタリスト、アンソニー・ウィルソンとの双頭作品『ノヴァ』❸を発表し、ブラッド・メルドーの夫人でもあるジャズ・シンガー、フルーリーンのアルバム、ジャズのサックス奏者ボブ・ミンツァーのビッグバンドのアルバム『フォア・ザ・モーメント』❻に参加するなど、今や活動は国際規模だ。

そしてこの6月、シコはボブ・ミンツァー・ビッグバンドのフィーチャリング・アーティスト待遇で12年ぶりに来日した。ベテランのジャズメンがひしめく中、シコはアンサンブル、ソロ、そしてヴォーカルも担当し、会場の「ブルーノート東京」を埋め尽くしたジャズ・ファンから盛大な拍手を浴びていた。

© Zé Gabriel Lindoso

——君の音楽の中には、MPBやショーロからジャズやクラシックまで多彩な要素がある。どのような音楽環境で育ったの？

シコ・ピニェイロ（以下CP） 母が家でいつも聴いていたショーロやMPBを、僕も自然に聴くようになった。ギターを弾き始めてすぐクラシックの音楽学校で学び、13歳の頃からジャズも聴き始め、バークレー音楽大学に留学してさらにジャズを勉強した。ビートルズ、ジミ・ヘンドリックス、スティーリー・ダンなどのポップ・ミュージックも大好きだ。僕は音楽に対する偏見を全く持っていないんだ。デューク・エリントンが話していたように〝良い音楽か、そうでない音楽か〟。僕の基準では〝良い音楽〟よりも〝自分が気持ちいい音楽〟、そう言ったほうがいいかな。

——影響を受けた音楽家は？

CP ギタリストではジョアン・ジルベルト、バーデン・パウエル、ブラジル音楽のハーモニーに革命を起こしたガロート、マルコ・ペレイラ、ハファエル・ハベーロ、ジョアン・ボスコ、ドリ・カイミ。ブラジル音楽の基本はギター・オリエンテッドだからね。作曲家ではトム・ジョビン、エドゥ・ロボ、ビシンギーニャ、モアシール・サントス、シコ・ブアルキ、繰り返しになるけどバーデンと、ハーモニーの面でも影響を受けたドリ・カイミ。ジャズではセロニアス・モンク、ウェイン・ショーター、ボブ・ミンツァー。僕が作る曲にワルツが多いのはショパンの影響だ。

——バイオグラフィーに「10代でゼー・ミゲル・ヴィズニッキのバンドに参加」とある。後から気がついたけれど、ゼー・ミゲルの『サンパウロ・リオ』❺にも参加していたね。彼とはどのように知り合った？

CP 僕の先生で、後に共作者になったギレー・ヴィズニッキがゼー・ミゲルの息子なんだ。ギレーを通して知り合い、ハイスクール時代にゼー・ミゲルのバンドに呼ばれて僕は本格的な活動を始め、バークレーから戻って彼の録音に参加した。ゼー・ミゲルは偉大な作曲家、そして素晴らしい詩人でもあり、とても多くのことを彼から学んだ。

Chico Pinheiro

——君のファースト・アルバムに参加したマリア・ヒタとの出会いは？

CP 彼女の歌手としてのキャリアは僕のバンドから始まったんだ。2001年だったか、僕が彼女の兄、ペドロ・マリアーノの録音に参加していた時期に、プロデューサーのセーザル・カマルゴ・マリアーノに誘われて、サンパウロのクラブ「スプレーモ・ムジカル」で彼とデュオのライヴをやった。そうしたら店のマネージャーが気に入って、僕にバンドで1ケ月間、出演しないかと言ってきた。僕は2人の女性歌手が欲しかったので、まずルシアーナ・アルヴィス（注：後のシコ夫人）を呼んで、もう1人をどうしようかと思っていたら、ニューヨークから帰国したばかりのマリア・ヒタがスタジオに遊びに来た。当時の彼女はまだ活動を始めていなかったけれど、スタジオの中庭でよく歌っていたので僕のバンドに誘ったんだ。こうして1ケ月の予定で始まった「スプレーモ」のショーはとても好評で、結局1年半、毎週出演した。その途中、マリア・ヒタはワーナーからソロ・デビューが決まったので1年で抜けたけれど、僕のアルバムには3曲、参加した。

——セカンド・アルバムには、やはりソロ・デビュー前のタチアナ・パーハがいる。

CP タチアナ・パーハはマリア・ヒタの次に僕のバンドに入り、半年間「スプレーモ」に出演した。キャリアの初期だったけれど半年の間にどんどん成長して、今では素晴らしい歌手になったよ。

——君の全てのアルバムに参加しているドラマー、エドゥ・ヒベイロとの出会いは？

CP 96年、バークレーの奨学金を得るためにオーディション・テープを送るにあたって、友人に紹介されてトリオを組み、録音した。初めて演奏した時から、僕たちには特別な親和力があると感じた。それ以来の親友で、兄弟と言ってもいい関係だよ。エドゥは僕が作る曲の世界観を完璧に理解している。テクニックが素晴らしいだけでなく、ダイナミズムもすごい。たんなるタイムキーパーでなく、ドラムスを通してメロディーを表現できるんだ。彼が最も尊敬するドラマー、トゥッチ・モレーノと同じように。そうそう、エドゥはトゥッチから譲ってもらったドラム・セットを使っているよ。

© TAKUO SATO

——同世代の才能豊かな音楽家たちと組んでいる一方、ファースト・アルバムに参加したシコ・セーザル、レニーニ、エヂ・モックをはじめ、年長の音楽家との交流も盛んだね。

CP バークレーに留学する前、ゼー・ミゲル・ヴィズニッキのバンドと同じ時期に、シコ・セーザルのバンドでも演奏していたんだ。レニーニとはシコを通して知り合った。

——セカンド・アルバム『シコ・ピニェイロ』❷から、偉大な詩人パウロ・セーザル・ピニェイロとの共作がスタートした。

CP 彼とはサンパウロのブテッコ（バー）で知り合い、生ビールを飲んでいろんな会話をしているうちに、自然に共作するようになった。ブラジルには、作曲家と作詞家のコンビはブテッコで生まれるという伝統がある。バーデンとヴィニシウスのように。彼の本名はパウロ・セーザル・フランシスコ・ピニェイロ、僕はフランシスコ・ピニェイロ。名前も同じなんだ。

——新作『ゼアズ・ア・ストーム・インサイド』❹にはペドロ・ルイスと共作した曲もある。彼との出会いは？

CP 僕の妻、ルシアーナがホベルタ・サーの友人でね、妻同士の友情を通して知り合った。ペドロも素晴らしい詩人で、以前から尊敬していたよ。

——君は作曲家／ギタリストとしてキャリアをスタートしたけれど、キャリアを重ねるにつれて自分で歌うようになってきた。動機は？

CP 自然で自発的なプレッシャー（笑）。ビスコイト・フィーノでセカンド・アルバムを録音するにあたって、フランシス・ハイミから『君自身が君の曲を歌ったほうが良い』と進言された。そこで発声を学び、このアルバムで初めて本格的に歌うようになった。今でも僕は、自分は作曲家／ギタリストであり、表現者としての歌手だとは思っていないけれど、自分の作品の歌い手ではある。尊敬するギンガが、彼自身の作品の偉大な歌い手であるように。

——ジョイスやホーザ・パッソスがいち早く君の才能に注目したように、君自身もマリア・ヒタやタチアナ・パーハなどの才能にいち早く注目した〝発見者〟だと思う。そこで今、注目している若い演奏家や歌手は？

CP 演奏家ではダニーロ・ブリット。まだ20代前半の、ショーロのバンドリン奏者だ。それからドラマーのセルジオ・マシャード。フィロー・マシャードの息子でとても良いドラマーだ。エドゥ・ヒベイロを尊敬している。ポップ・ミュージックの中では、ダニ・ブラッキ。才能があって歌も素晴らしく、人柄もとてもスイートだ。そしてゼウ。彼女も素晴らしい歌手で、友人でもある。他にも大勢いる。まだ名前が知られていないが、たとえばブラジリアのショーロのギタリストとか。

——ボブ・ミンツァーのビッグバンドに招かれるなど、活動がどんどん国際的になってきた。今後の予定は？

CP 今年はすでに5回、アメリカに行った。オルフェウス・オーケストラとも共演したよ。ソリストとしてヴィラ＝ロボスや自分の曲を演奏したんだ。8月には僕のバンドでカリフォルニアに行き、「カリフォルニア・ブラジル・キャンプ」でワークショップを行なう。9月にはニューヨークのリンカーン・センターの「ジェネレーション・イン・ジャズ」というプロジェクトに出演する。このコンサートにはジョイスも出るよ。

——新作の予定は？

CP セルジオ・サントス、アンドレ・メマーリとのコラボレーション・アルバム『トリス（TRIZ）』が、もうすぐ出る。とても興味深いプロセスで作ったアルバムで、3人がそれぞれ曲の一部を持ち寄って、それをもとに共作して完成した。録音は、基本的には僕たち3人で、曲によってエドゥ・ヒベイロ、ガブリエーレ・ミラバッシなどが参加した。セルジオがミルトン・ナシメントのようなヴォーカリーズをしている曲もある。歌詞は少ないけれど、僕は歌が大好きなので、歌ごころのあるインストゥルメンタル音楽になっていると思う。

今回はジャズのビッグバンドでの来日だったので、情報が届かずライヴを聞きのがしてしまったファンの方もいただろう。次回はぜひ、彼自身のバンドで来日して、エドゥ・ヒベイロとの鉄壁のコンビネーションを披露してほしいと思うが、それが無理ならジョイスのゲストという形が現実的かもしれない。思えば『トリス』でコラボレートしたセルジオ・サントスもアンドレ・メマーリも、初来日はジョイスがらみだった。今年ももうすぐジョイスが来日するので、彼女にリクエストしてみよう。（インタビュー協力：ブルーノート東京）

© Zé Gabriel Lindoso

❸ "Nova" Chico Pinheiro & Anthony Wilson (2007)
(Buriti records BR001)
ツイン・ギターのインスト盤。2人のオリジナルが中心で、ウェイン・ショーターの作品にはイヴァン・リンスがヴォーカルで参加。

❷ "Chico Pinheiro" Chico Pinheiro (2005)
(Biscoito Fino BF647)
シコ自身とルシアーナ・アルヴィス、タチアナ・パーハがヴォーカルを担当。ゲストにジョアン・ボスコ。インストも4曲ある。

❶ "Meia-Noite Meio-Dia" Chico Pinheiro (2003)
(Art Music 241157) © Buriti より再発
全曲がオリジナルでインスト2曲。シコ・セーザルとの共作も。本作が初録音のマリア・ヒタら同世代の若手から大先輩まで参加。

❻ "For The Moment" Bob Mintzer Big Band (2012)
(PCCY-30200)
ジャズ界を代表するビッグバンド。新作のテーマはブラジル音楽。シコのオリジナルも2曲あり、歌手としてもフィーチャーされる。

❺ "São Paulo Rio" Zé Miguel Wisnik (2000)
(Independente s/n)
本誌6月号の名盤700選にも選出された、マルチな才人ゼー・ミゲルのリーダー作。シコは7曲でギターを演奏し編曲も手がけた。

❹ "There's A Storm Inside" Chico Pinheiro (2010)
(DOCB-1009)
自ら歌う曲が多い。ゲストのダイアン・リーヴスが歌うタイトル曲はジェシー・ハリスとの共作。ボブ・ミンツァーもゲスト参加。